

# 「越谷吾山」について

加藤 幸一

## 吾山についての概略

越谷吾山(越ヶ谷吾山)は江戸時代の享保2年(1717年)頃の生まれでのちに江戸に出て活躍し天明7年(1787年)12月17日に71歳で没している。吾山は越ヶ谷の新町の旧家会田家6代か7代目の会田文之助にあたりと考えられている。

吾山は「俳諧叢書」(1779年)などを著し俳人としてすぐれていて芸道の高い称号である「法橋」の位が授けられている。吾山の晩年の頃「南総里見大伝」の著者としてよく知られている滝沢馬琴(1767~1848年)は俳諧を学ぶため吾山に師事している。

また吾山は学者としてもすぐれ特に吾山の名を高めたのは安永4年(1775年)に完成した「物類称呼」である。これは全国の方言をまとめたものでこの種のものとしてはわが国で最初である。それゆえ吾山は「方言学の祖」といえる。

吾山一周忌(吾山が没してから満1年後)追善句集「もとの水」の中に吾山の没年月日は「天明七丁未歳十二月十七日没年七十一」と記されている。このように吾山は天明7年(1787年)12月17日に71歳で江戸日本橋室房(今の日本橋室町と思われる)で息をひきとっている。この没年から逆算すると吾山の生まれた年は八代将軍徳川吉宗がおさめていた享保2年(1717年)にあたる。吾山は越ヶ谷新町の旧家会田家(現在の越ヶ谷2-4、会田幸氏の家にあたる)6代か7代目にあたる会田文之助(代々文之助を名のっていた)とみられている。吾山が会田家の出であるとわかったのは天蔵寺の塔頭(大寺の内にある小院でわきでらともいう)である法久院(すでに廃寺となって今はない)の「霊名簿」(過去帳のことで寺院で檀家や信徒の死者の法名・俗名及び死亡年月日などを記し置く帳簿。なお法名とは死者につける名、俗名とは一般人の生存中の名をいう)の中に「法橋院 往嘗 吾山師竹

居士」(「院」の字があるがこれは誤記と思われ「法橋住蒼吾山師竹居士」が正しい)の法名(戒名ともいう)と その施主欄に新町会田文之助と記された箇所が発見されたためである。さらに新町旧家会田家の繰位牌(位牌とは死者の法名を書いた木の札)の中から「法橋住蒼吾山師竹居士」と書かれた法名があることから確認された。それと同時に天嶽寺の墓地よりその法名を刻んだ墓石が見つかっている。

新町会田家は越谷宿開発人の一人で代々越ヶ谷の新町の名主をつとめた家柄である。新町会田家の先祖は信濃の国の国司をつとめた海野家の出で天正2年(1574年)越ヶ谷に定着したといわれ越ヶ谷郷 会田出羽氏の一族とみられている。

なお越谷吾山の墓石が会田家の墓地でなく、そこから少し離れている神田家(家号は亀屋、当主は代々亀屋甚内、略して亀甚と名のったこともある)の墓地にある。それについてなぜ神田家の墓地内にあるのか、二、三のみかたがある。その一つに吾山の墓石は滝沢馬琴の記述によると深川 靈巖寺にあることになっている。しかし現在そこには吾山の墓石はみあたらない。それは吾山の二番目の妻の実家にあたる神田家の誰かが 靈巖寺からこの天嶽寺に移して それに妻の名などを刻み 改めて葬ったので 神田家の墓地にあるのだとしている。

俳諧(俳句のこと)の盛んな越ヶ谷の中で育った吾山の俳諧入門は幼年の頃とも考えられ 元文5年(1740年)吾山24歳には 白井高醉の撰による「冬野あそび」の中に吾山の名がでてくる。越ヶ谷は江戸に近く しかも宿場町であったので俳諧の教文を受ける機会が多かったとみられ 寛保3年(1743年)吾山27歳の頃にはすでに江戸の武士で俳人の佐久間柳居の門人の一人となっていたようである。それは芭蕉50回忌にあたる寛保3年の柳居による深川長慶寺の発句塚再興、及び同年 柳居の師弟に吾山も加って鎌倉光明寺の十夜詣に参加していることから確かめられる。(八島晃正著「越谷町今昔物語り」によると「24歳の時 江戸の武士俳人佐久間柳居の門に入った」とある) また

吾山が江戸に出た時期は 宝暦14年(1764年)から 明和7年(1770年)にいた  
る48歳から54歳までの間とみられている。それは 宝暦14年の鳥酔の「  
わか松原」に越ヶ谷吾山と「越ヶ谷」の肩書がまだみられるので まだこの時は  
越谷にいて 江戸に移住してないと考えられ、ところが その後の明和7年には  
すでに江戸馬喰町1丁目に住居をかまえていたことが明和7年の「俳諧體 後篇  
で確認される。 もう一步進めて考えると 明和5年(1768年)秋の「俳諧體  
初篇」には吾山の名がみあたらないのは まだ江戸に出ていなかったのだからそこ  
には加えられなかったとみなすと、吾山の二番目の妻が 明和5年(推定)になく  
なったのを機会に 明和5年の吾山52歳の頃、江戸に移住したとも考えられて  
いる。吾山は 子宝に恵まれた人で 先妻(先妻は二人いて それぞれ死に別れ  
ている)の子も含めると 10人以上(そのうち少なくとも8人は娘)はいて 子  
供が多かったためか三番目の妻を江戸でむかえていると思われる。それは、  
吾山一周忌の追善句集「もとの木」や 吾山の歳旦帳(俳諧の師匠が正月、自分  
と門人から集めた句を書きしるしたもの)「東海藻」などの考察よりわか  
る。吾山が馬喰町1丁目にいた頃から品川岡河岸居住の頃までは 吾山の庵号  
(「何々庵」と「庵」で終る号。号とは学者、文人、画家などが本名・列名のほかに  
つける風流な名のこと)は 古菴庵であったが のちの日本橋室坊に住居をか  
まえた頃は 師竹庵と称している。

吾山は 江戸にでてから大いに活躍するのであるが 学者としての吾山の名を  
すこぶる高めたのは 安永4年(1775年)吾山59歳に「諸国方言物類称呼」(  
略して「物類称呼」)五巻が完成し刊行をみたことである。これは全国の方言  
を 巻一(天地・人倫)、巻二(動物)、巻三(生殖)、巻四(器用)、巻五(  
言語)に分けて集録したもので 方言研究上 重要な書物となっている。この  
種のものとしては わが国最初のものである。それゆえ 吾山は「方言学の  
祖」といわれる。この「物類称呼」について 平田篤胤は文化12年(1815  
年)の伴 信友にあてた書簡に「諸国方言物類称呼などといふもの御覽被  
成候か 随分 取べき事もあり 薄き五冊也」と記されている。

吾山の<sup>おんやま</sup>俳歴について述べると江戸に出てからが<sup>おんやま</sup>著者でよく知られている著述として安永4年(1775年)の「物類称呼」の他に安永8年(1779年)の「俳諧<sup>はいかい</sup>聖櫓<sup>せいろう</sup>」(「聖櫓」は越谷市立図書館の館長木村信次氏によって苦心のすえ安永8年刊の<sup>せいほんほん</sup>木版本を手に入れている)、天明4年(1784年)の「朱紫<sup>しうし</sup>」である。いずれも江戸に出てからのものである。滝沢馬琴の著わした「吾山<sup>ごやま</sup>記」の中に「越谷<sup>こしがや</sup>氏<sup>し</sup>師竹庵<sup>しらくあん</sup>法橋<sup>ほふきょう</sup>吾山<sup>ごやま</sup>はじめ柳馬<sup>やなぎうま</sup>の門人也。後沾山<sup>せんざん</sup>(二世沾山をさすとと思われる)に従うて判者<sup>はんしや</sup>になり。当時(天明元年の頃と思われる)独立、その家は駿河町<sup>すまがらやう</sup>(日本橋室房<sup>むろぼう</sup>をさすとと思われる)にありき」とある。吾山が俳諧の判者(作品の可否・優劣を判定する人)になったのは明和7年(1770年)の江戸判者の総覽書「俳諧<sup>はいかい</sup>總覽<sup>そうらんしよ</sup>」に吾山の名がのっているのでこの頃かもしくはこれより前の頃と考えられる。芸道の高<sup>たか</sup>い称号である「法橋」の位は安永8年(1779年)刊の吾山著「俳諧<sup>はいかい</sup>聖櫓<sup>せいろう</sup>」に「法橋吾山<sup>ほふきょうごやま</sup>越谷<sup>こしがや</sup>秀真<sup>しゆま</sup>」との名がみられるのでこの頃にはすでに授けられていたのである。もしかすると安永6年、吾山61歳の還暦の時、これを祝ってこの年に授けられた(志田義秀著「越谷吾山」より)のかもしれない。

吾山晩年の頃、「南総<sup>なんそう</sup>里見八犬伝<sup>りみんへん</sup>」の著者としてよく知られている滝沢馬琴(1767年~1848年)が吾山に俳諧を学んでいる。この馬琴は吾山のことを「奥に蕉翁<sup>しやうおう</sup>(松尾芭蕉のこと)の再生やといわん後世<sup>こうせい</sup>蕉翁なきことを憂うることなかれ」と<sup>げんきしやう</sup>激賞したこともある。

以上から吾山は蕉風(芭蕉のはじめた俳句の<sup>はいきゆう</sup>作風)を受けついで越谷市のほこれるすぐれた俳人でありまたわが国の方言学の祖といえるであろう。

市史編さん室本間清利先生の御協力を得ました。なお使用した文献は次の通り

『越谷吾山』(帝国大学教授志田義秀著 昭和9年刊)

越谷市史通史上 p1113~p1117

『越谷町今昔物語』(八島晃正)

市史編さんだより 昭和43年8月15日付(木村信次)

昭和49年8月15日付(小沢正弘)



吾山の墓石

吾山の後妻(二番目の妻)の両親と推定される墓石

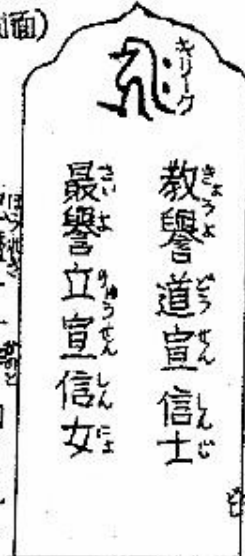
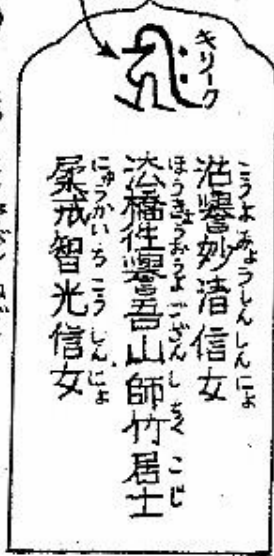
(向かって左の側面)

(向かって右の側面)

(向かって左の側面)

(向かって右の側面)

種子(阿彌陀仏をあらわす)



若 延享元子歳 九月三日  
 天 明七 未歳十二月十七日  
 明和五子歳八月二十日

宣 戒 童子  
 二月十四日

空 曆 十一 四月九日  
 妙 栄 信 女 享保十一年  
 八月二日

宝 曆 五 五月十一日  
 浩 譽 妙 清 信 女 明 和 五 年 八 月 廿 日

法名(戒名)

男子には居士、信士を 女子には 大姉、信女を 法名につける。

8歳(または4歳)以上20歳未満の少年は童子

「法(法)橋住(往)譽(譽)吾山師竹居士」は 吾山の法名

「浩(浩)譽(譽)妙清(清)信女」は 吾山の墓石の向かって右どなりにある墓石の側面に これと 全く同じ法名があることから 神田家からでた吾山の 後妻(二番目の妻)と考えられている。没年は 宝曆五年(乙亥)5月11日である。吾山の墓石の側面に刻まれた没年には、延享元年となっているが 屍戒智光の誤まりらしく「明和五子歳八月二十日」と刻まれたものが 浩譽妙清信女の没年であろう。

# 吾山百五十年忌碑銘

(所在地) 越ヶ谷天嶽寺境内

(大きさ) 高250cm. 幅85cm. 厚30cm

(表面)

ひとつる人<sup>(バ)</sup> 水のひかるや けさの秋 吾山

(裏面)

## 百五捨年忌記念建碑

師竹菴吾山は 越谷の人 姓は會田氏 名は秀眞 信濃の名族 海野  
の裔なり 方言を究め 俳諧を好み 柳居・沾山の門に學ぶ 法橋に叙  
せらる 曲亭馬琴の師なり 天明七年未年 十二月十七日 七十一歳を  
以て 江戸に歿す 著すところ 物類稱呼・嬰檀・朱紫等あり

月と汐

(発起人物代 志田素琴 以下五名を刻む)

昭和九年 十二月十日

當山 三十世 榎本 一成

石工 小島 勝

# 吾山句碑

(所在地) 越ヶ谷久伊豆神社境内

(大きさ) 高115cm 幅90cm 厚22cm

(表面)

法橋 吾山

出る日の 旅のころもや はつかすみ

露翁書(花押)